



予防的医療や脳卒中後の治療に専念すべく開業

——開業までの経緯と新クリニックでの診療の現況についてお聞かせください。

医学部を卒業以来、約20年にわたって脳神経外科医として多くの病院に勤務してきました。救急医療を行う病院に長く勤務していたこともあり、脳卒中や頭部、脊髄の外傷に対する医療に携わってきました。しかし、これらの急性期病院では転院も多く、1人ひとりの患者さんに向き合った長期的な医療を実施することは困難です。脳卒中の治療を行った患者さんが、その後どのような経過を辿ったのか知ることができず、医師として忸怩たる思いを抱えていました。

脳卒中は、発症する前に危険因子を見つけて、高度な医療を提供する施設に紹介することが重要です。また、一度発症すると、一生付き合っていかなければならない後遺症を残すことも多いことから、患者さんも地域の顔なじみの医療機関で長期にわたり診療を受け続ける方がいいですし、医師も経過を見る上でメリットが大きいと考えたのです。

そこで、私は視点を変え、日常生活管理や、投薬による基礎疾患への治療をメインとした脳卒中予防に取り組みたい

と考え、開業することを決意したのです。開業前の勤務地が福岡市だったこともあり、この地で開業することに決めました。福岡は九州で最も人口が多い地域でもあり、高齢化が進んでいる都市部では医療ニーズが高いと考えた点も、この地で開業することを決定した要因の1つです。前任地の病院から私のクリニックに通院してくださる患者さんも多数おられ、ありがたいと思っています。

——IT化について、電子カルテ選定のポイントについてお聞かせください。

医療ITに関して言えば、私が研修医の頃から電子カルテが普及し始め、これまで勤務した多くの病院で導入されていたことから、開業に際しても電子カルテを導入することは自明でした。

また、当クリニック開設に際して、設備面で重視したのは、画像診断装置の充実化です。脳画像診断においては、1.5テスラ以上の超電導MRIが不可欠です。CTは出血性病変や骨病変の他、撮像時間の短さから小児の外傷に威力を発揮します。そのため、これらのモダリティを導入することは、開業の際の決定事項でした。

そこで、電子カルテ導入に際しては、CTやMRIといった画像診断装置とMWMによるスムーズな画像連携が実

現できなければ診療に大きな影響を及ぼすと考え、数ある診療所向け電子カルテの中から医用画像表示用ソフトウェアを標準で装備する島津製作所/島津メディカルシステムズの「SimCLINIC T3α XLink package」を選定しました。

モダリティとの連携を重視 医事・画像との一体化を評価

——「SimCLINIC T3α XLink package」で気に入った機能等をお聞かせください。

「SimCLINIC T3α XLink package」は、電子カルテと医事会計、画像情報システムが一体化したシステムなので、医師も看護師も事務員も簡単に操作できる分かり易い仕組みが良いですね。全てのシステムが一体化されているので、端末も複数台のPCを置く必要がなく、作業スペースが簡素化できます。

最も重視した画像連携の機能に関しては、モダリティと完全にリンクし、ストレスを感じることなく運用できています。撮影した画像データを電子カルテ画面に貼り付けられる機能も有用性が高いです。脳神経外科医は、患者さんの顔をはっきり記憶していなくても、脳の状態はしっかり記憶している事が多く、カルテ画面上の画像を見ただけで、どのような患者さんだったかを逆に想起させてくれる

福岡県 古賀市

IT活用事例

2

かわくぼ脳神経外科

院長 川久保 潤一氏

稼働電子カルテシステム

SimCLINIC T3α XLink package
(島津製作所/島津メディカルシステムズ)

各モダリティとの高度な連携を図り カルテと画像と医事を一体的に管理。 脳卒中予防を重視した医療を展開

脳卒中の予防や、地域における同疾患の長期にわたる継続的な診療に取り組むために2018年5月開院した、かわくぼ脳神経外科。脳卒中だけでなく、頭部への高エネルギー外傷といった生命に直結する患者に対する手術を含め、豊富な臨床経験を持つ川久保潤一院長は、1.5T MRIや16列CTをはじめとする多数のモダリティを導入。加えて、電子カルテ「SimCLINIC T3α XLink package」を中心とした、医用画像と診療情報、医事会計がシームレスに連携する医療IT環境を整備。川久保氏は、「高性能な画像診断装置を活用し、脳卒中の予防や頭部外傷の診療を通じて地域の患者さんと長くお付き合いのできる医療を実践していきたい」と話す。

Clinic Information

かわくぼ脳神経外科



住所：福岡県古賀市花見東5丁目1-33
電話：092-940-4970
標榜科目：脳神経外科

超電導1.5T MRIや16列CT他、画像診断装置が充実 質の高い医療とともに、脳卒中のかかりつけ医を目指す

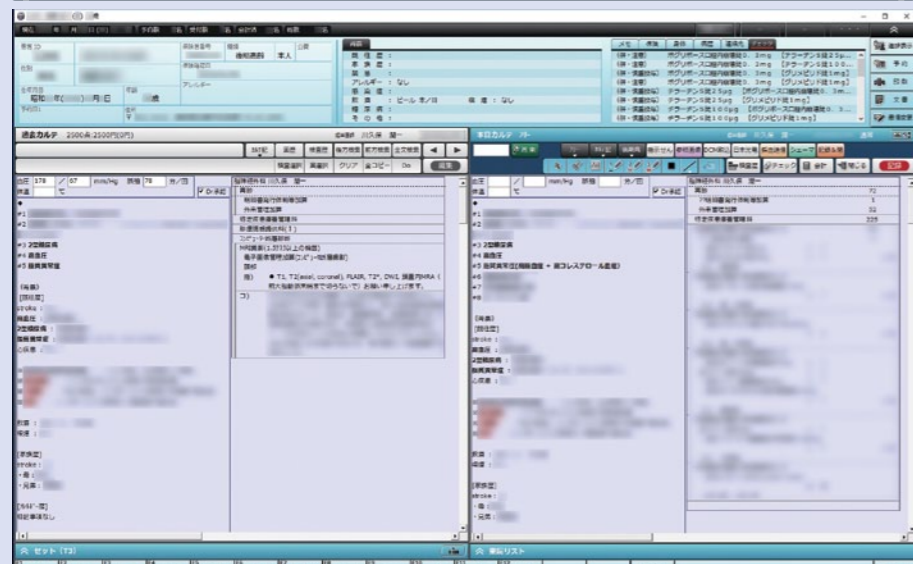
九州・沖縄地方の救急病院で脳卒中をはじめとする急性期医療の腕を磨いてきた川久保潤一院長が開業したかわくぼ脳神経外科。オープンは2018年5月。

同クリニックは、1.5T MRIをはじめ、16列CTや超音波画像診断装置など、高性能なモダリティを多数揃え、脳卒中の兆候となる未破裂脳動脈瘤の画像診断などに活用、質の高い脳神経外科診療を展開している。

JR千鳥駅から徒歩10分、北九州市と福岡市を結ぶ国道495号線沿いという交通至便の立地条件に加え、26台の駐車スペースを確保するなど、地域の人々が気軽に受診できる環境を整備している。

スタッフは、川久保院長に加え、看護師、事務員を含め計7名が勤務している。隣接する整形外科クリニックと連携した医療も併せて実施している。

カルテ入力画面

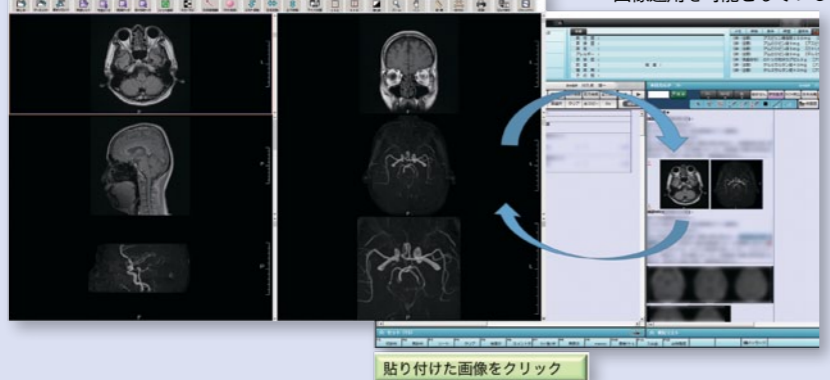


電子カルテ画面は、医師が使いたい機能がすぐに使えるように各機能のボタンをわかりやすく配置。診察に必要な機能や情報を、画面を切り替えることなくスムーズに利用できる

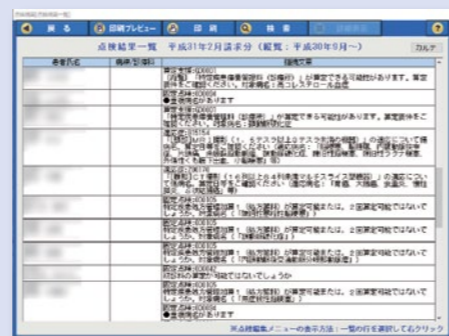


高齢者への検査が容易な最新型のモダリティとして1.5T MRI (GE社製) (写真上)、16列CT (GE社製) (写真下) など、多数を装備

ワンクリックでカルテに画像を貼り付け
ビューリンクにより標準装備の医用画像表示ソフトウェアとの完全連携を実現。各モダリティとは完全なMWM連携により、シームレスなDICOM画像運用を可能としている

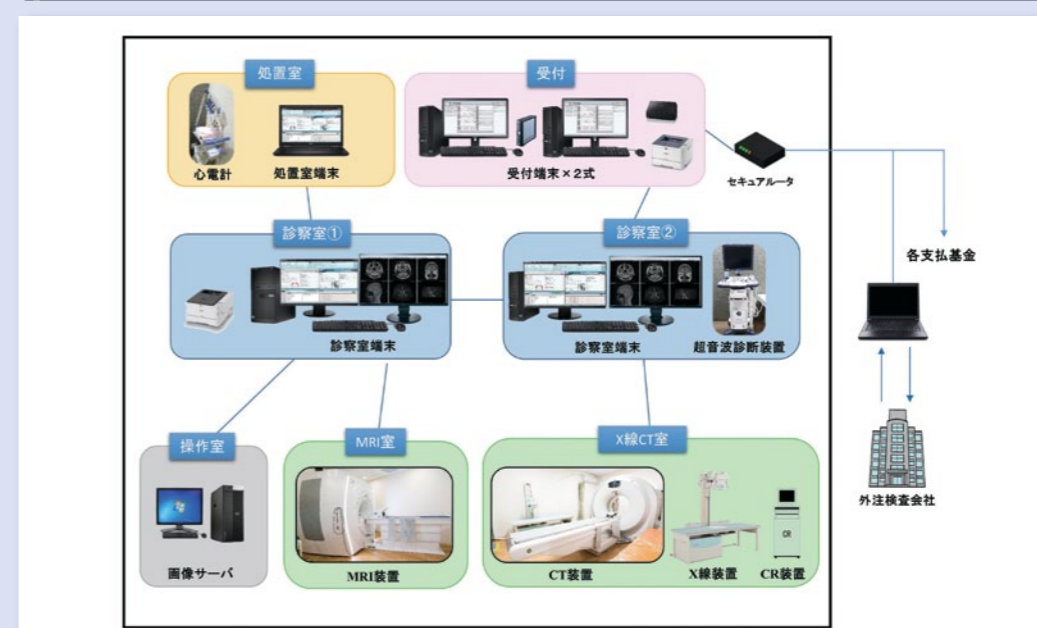


貼り付けた画像をクリック

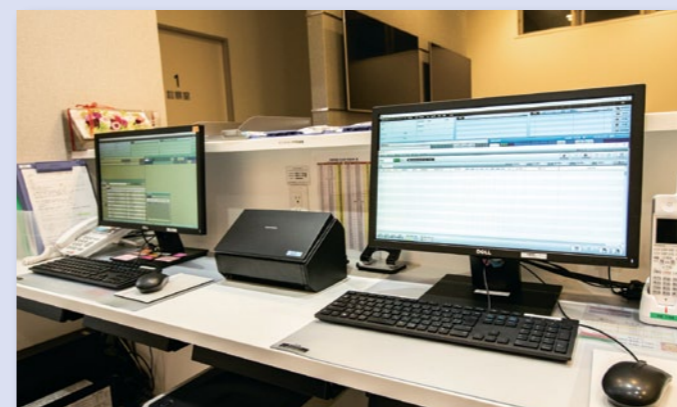


レセプト機能も一体化しており、レセプトチェック機能を有するなど、レセプトの点検精度を向上させる多彩な機能で業務の効率化に貢献する

かわくぼ脳神経外科 システム構成図



電子カルテ端末は、診察室や受付、検査室等に、5台を設置。クリニック内各所で診療情報のシームレスな連携を実現している



受付には2台の電子カルテ端末を設置。電子カルテには予約機能も搭載。来院予約を簡単に記録できるほか、予約票の印刷も可能である



診察室では、モニターアームに電子カルテ用モニタを設置。診察する医師だけでなく、患者にも医用画像等を閲覧し易くするなどの工夫を凝らしたレイアウトを構築

ため、好んで使用しています。電子カルテ画面上の画像をクリックすると、画像ビューア画面から画像を詳細に見ることができます。電子カルテに直接データを取り込んでいるわけではないので、システムに負荷はかかっておらず、電子カルテそのもののレスポンスは速いままです。医事会計に関しては、レセプト機能だけでなくレセプトチェック機能が標準装備されており、適応症が入っていないと赤く警告表示が出るなど、病名漏れなどを防いでくれ、レセプトの点検効率向上に貢献しています。脳神経外科では特殊な医療用語も多い上に、開業したばかりで不慣れた医療事務スタッフにもかかわらず、安心して医事会計業務を行えるので、とても有難いです。加えて、「SimCLINIC T3 a XLink

package」には診療予約機能も備わっているため、この点も重宝していますね。小児科や耳鼻科など通院患者数が膨大な診療科では、専用の予約システムが必要かもしれませんが、脳神経外科では患者さんの絶対数は多くないので、MRI検査の日程などを予約するために使っているのですが、とても便利です。これらは、電子カルテと医事会計、画像情報システムが一体となっているゆえに可能なのであり、一体型電子カルテ最大の特長なのではないかと思えます。**画像データはクラウド保存ベンダの助力に大いに感謝**——電子カルテを運用する際に工夫した点についてお聞かせください。電子カルテ導入に際しては、まず患者

ファーストの立場に立ち、診察室での画面レイアウトを工夫しました。医用画像モニターには2メガのカラーモニターを採用し、それを横長で、高さや角度を調節できるモニターアームに付けることで、患者さんにも画像を見易くする工夫をしています。画像データは、クラウド・サーバで長期保存する体制にしています。ただし、普段の診療で使う画像については、クリニック内のサーバに保存・運用しています。完全クラウド型の電子カルテも検討はしたのですが、レスポンスに難があり、その点はオンプレミス型のシステムに分があると考えています。もちろん、サーバは冗長性が保たれていますので、通常データの保存には問題ありません。——システム導入に際して、ベンダの対

応はいかがでしたか。ベンダのスタッフは、各種モダリティの接続・運用に加え、電子カルテの導入についても、詳しく丁寧に操作法を説明してくれました。カルテ画面についても、ボタンの設定、電子カルテ入力用のマスタやセットを組むのも協力してくれ、助かりました。電子カルテの使用経験はありましたが、これまでと違い、クリニックのITに関しては院長が全て対応していかなければなりません。そのような観点から、電子カルテ導入に際して、島津メディカルシステムズの担当者が果たした役割は大きかったと感じています。開業後半が経過しましたが、システムは安定して稼働しており、トラブルは起きていませんが、ベンダの担当者には

足しげく当クリニックに通って頂き、当方のさまざまな要望に迅速に対応して頂いている点も、大いに感謝しています。——今後のIT化を含めた運営方針についてお聞かせください。患者数は順調に増えていますが、脳神経外科における収益は、MRI検査の件数をどれだけ増やすかにかかっています。隣接する整形外科クリニックとの連携や、脳ドックを中心とした健診事業を始めるなど、MRIの検査件数を増やす工夫に取り組んでいます。また、私の専門外である科の先生が非常勤医として異なるアプローチで疾病管理を行って頂けると、クリニックの診療の幅がさらに広がると考えています。医療ITに関しては、事務スタッフの労働軽減と、患者間違いなどのトラブル

が起こらないように、今後は大型モニターによる患者呼出システムの導入など、受付周辺の機能を強化していきたいと思っています。

Doctor

川久保潤一 (かわくぼ・じゅんいち) 氏
長崎大学医学部歯学部附属病院脳神経外科入局。長崎県立島原病院、沖縄県南部医療センター・こども医療センター、相生会福岡みらい病院、光川会福岡脳神経外科病院等を経て、2018年かわくぼ脳神経外科を開業